

ビバハウス便り NO.98 若者の未来を開く「ビバ農業塾」

ビバハウス 責任者 安達 俊子

いよいよ北海道にしかない春と短い夏が一緒に来たかのような、どこもかしこも緑一色のシーズンを迎えた。命の輝きと勢力に満たされた自然界とは裏腹に、人間界の若菜たちにはますます厳しい毎が続いている。かってビバの若者たちから、この命に溢れたような季節が自分たちには一年中で一番つらい、自分たちだけが取り残されていく気がするからと聞かされたことを改めて思い出させられた。

最近何よりもショックだったのは、ビバに関わっていた若者の突然の死を知らされた事だ。彼は都合4回ほど、ほんの短時間だけビバに滞在しては、そのつど突然家に帰ってしまう事を繰り返していた青年であった。今回も彼の事を家族で一番案じていた祖母より、「近いうちにいずれはまたお伺いするのではないかと思います。」との連絡を受け、私たちも心待ちにして、今度こそある程度の長さで頑張ってくれるのではないかと、ひそかに期待していたところへの突然の訃報であった。

家族からの手紙の文面だけからでは、詳しい状況は分からないが、他に家族が誰も家にいない間に、自ら命を絶つていたことだけは読み取れた。ビバにいた総日数もほぼ15日ほどしかなく、その間自分からはほとんど誰とも会話をすることもなく、スタッフからのさまざまな問いにもかすかな反応を示すだけだった。彼のことを案じてくれた数人のメンバーは、わざわざ彼のために、自分自身も彼と同じように最初は誰とも話も出来なかった自分自身の体験を語ってくれて、彼のビバでの生活の向上を促してくれたが、今となっては全く残念な結果だけが残ってしまった。

ビバとしては、せつかくビバに繋がった若者を守れなかった悔しさ、無力さを痛いほど思い知らされざるを得なかったが、ご家族のお気持ちは察することさえも出来ない。2度と再び、同じ悲劇を繰り返さないために、何が私たちに必要なのかを真剣に学びたい。最近のある統計でも、大学生の就活者の約2～3割の若者がその過程で自殺を考えたと報道されていたが、自分が何のために生きているのか、コンナ自分は死んだ方がいいのではないかと誘惑はどんな若者にも忍び寄っているに違いない。

今こそこの超少子・高齢化社会の中で、この国の将来のあり方を変える一人ひとりがかけがいのない若者たちの健全な成長を支える全社会的な対応が求められている。

ビバハウスとしても最近特に頻繁になってきたビバ卒業生のSOSに応え、また社会全般の困難を持つ若者の受け入れの状況悪化に対応するために、札幌市の「農業塾風のがっこう」(長谷川豊理事長・酪農学園大学元教授)と提携して、「ビバハウス農業塾」の開設を準備する事を決定した。ビバハウスから約15分の「ビバ・モンガク農場」(約7ヘクタール)を活用し、およそ3～4年の実習過程で、希望するものには自営農民への道を切り開く構想である。すでにこの構想に全面的に賛同をしている、長谷川先生と親しい連合北海道関係の皆さんが、越冬用のビニールハウス建設資金造成の呼びかけ準備に入って下さっていると嬉しいニュースが昨日札幌から入った。